

小学4年生に対するクラスワイドのポジティブな行動支援

移動時の整列行動に対する集団随伴性を用いた介入と Positive Peer Reporting の取り組み

○野田航

月本弾

大対香奈子

田中善大

大久保賢一

(大阪教育大学教育学部) (畿央大学教育学研究科) (近畿大学総合社会学部) (大阪樟蔭女子大学児童学部) (畿央大学教育学部)

KEY WORDS: クラスワイドPBS・集団随伴性・Positive Peer Reporting

(目的)

現在、学校教育においてポジティブな行動支援 (positive behavior support: PBS) が注目されるようになっており、学校での「学び」を保証するために「望ましい行動を育てる」という発想の重要性が指摘されている。学校教育における PBS は問題行動のある個人だけでなく、クラスワイドあるいはスクールワイドの支援 (第1層) から個別支援 (第2,3層) までのシステムアプローチが有効である (Sugai & Horner, 2002)。本研究では、クラスワイドPBSに焦点を当て、移動時の整列行動に対する集団随伴性 (group-oriented contingency: 小島・氏森, 1998) を用いた介入と児童同士の「いいところ見つけ」のための Positive Peer Reporting (PPR; Skinner et al., 2002) の取り組みの効果について検討することを目的とした。

(方法)

対象学級: 公立小学校通常学級4年生の学級 (N = 17) が本研究に参加した。対象学級には特別支援学級に在籍する児童が1名含まれていた。この学校では、スクールワイドPBSの実践と専門家によるコンサルテーションが実施されており、本研究は著者らがコンサルタントとして関わったものである。研究の実施および成果の公表については、教育委員会および学校長と学級担任の同意を得ている。

コンサルテーション: コンサルタント (第一著者) が行動観察を行い、学級担任との協議の元で標的行動を選定した。学級担任との話し合いの中から、「移動時の整列時に私語が多く、時間がかかりすぎる」「子どもたち同士の関わり合いが少なく、全体的に元気がない印象である」ということが話題としてあがり、移動時の整列行動に対する集団随伴性を用いた介入と PPR の取り組みをコンサルタントが提案し、学級担任が実施および行動の記録を行った。

整列行動に対する介入: 体育の授業 (週2回程度) 前の移動時に、教室後方入り口に並ぶ行動 (整列行動) を標的行動とした。従属変数は整列までにかかった時間 (秒) であり、学級担任が「並びましょう」と指示を出してから全員が整列を完了するまでの時間をストップウォッチで測定した。ベースライン測定の後、目標設定による介入を行った。目標設定ではまず、学活の時間にベースラインのタイムを見ながら話し合い、目標タイム (94秒) を設定した。そして目標タイムを達成できるように児童同士で声をかけあって頑張るように声かけを行った。その後、目標設定にグラフフィードバックを追加した介入を実施した。この介入では、整列時間を折れ線グラフで掲示し、グラフの読み取り方を説明した。目標設定とグラフフィードバックによる介入の後、フォローアップとしてベースラインと同じ条件でデータ収集のみ実施した。

PPRの取り組み: PPRとは、仲間同士の相互作用の改善に効果的な仲間媒介による介入法である (Skinner et al., 2002)。毎日短い時間を設定し、その時間の中で標的となる児童の適切な行動に対してお互いが賞賛する。その結果、児童同士のお互いの関係性や捉え方に変化をもたらすと考えられている。本研究では、ベースラインとして帰りの会に3分間設定し、クラスメイトあるいは担任の「いい

ところ」を見つけてカードに書いた。介入では、書く時間を5分に設定し、記入する内容について助言した (詳しく書く、なるべく同じ人よりも多くの人のいいところを見つける等)。学級に配置されている支援アドバイザーが、児童が書いたカードの枚数を数え、枚数に応じてシールを台紙に貼っていき、言語賞賛を行った。また、シールに加え、毎日のカード枚数を棒グラフで示してフィードバックした。(結果)

整列行動に対する介入: ベースラインでは整列にかかった平均時間は142秒であった。目標設定による介入で94秒を目標タイムに設定したところ、目標達成が安定的には見られなかったため、整列にかかった時間をグラフでフィードバックした。その結果、5回中4回目目標タイムよりも早く整列することができた。さらに、フォローアップにおいて介入がなくても素早く整列する行動が維持されていた。

PPRの取り組み: ベースラインにおいて書いたカードの平均枚数は47枚であったが、介入における平均は87枚と増加していた。制限時間があることも影響し、介入の途中から1日に書いた枚数に変化が見られなくなったが、継続して介入終了時まで多くの枚数を書き続けることができた。(考察)

整列行動に対しては目標設定とグラフフィードバックを用いた集団随伴性による介入によって整列時間が減少した。副次的な効果として、少なかった児童同士の声かけが増加し、「静かにしよう」という声かけが増加したことが学級担任から報告された。また、PPRの取り組みによって児童同士のポジティブな関わり (児童が自主的に他児を手伝う、協力する) が増加し、継続的な実施によってクラスメイトの目立つ適切行動だけでなく、さりげないいいところを見つけてことができるようになった。対象学級のある小学校では同時にスクールワイドPBSによる取り組み (あたたかい言葉かけ) が実施されており、本研究の取り組みの成果に影響していることが考えられる。

(文献)

Skinner et al. (2002). *Psychology in the Schools*. 39, 191-202.

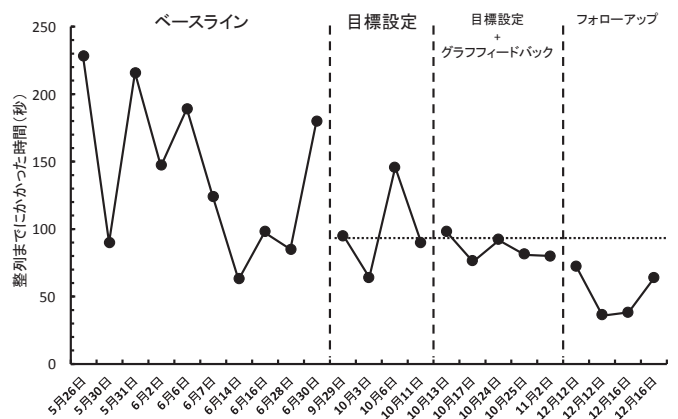


図1 整列にかかった時間の変化

(NODA Wataru, TSUKIMOTO Hazumu, OTSUI Kanako, TANAKA Yoshihiro, OHKUBO Kenichi)